

17年にわたり、地域に根ざした診療を続けてきた東区から移転し、1月21日開院。子どもの将来を見据えた医療に邁進、「小児アレルギー疾患や喘息の

院長 訪問

とで、肌のかきつきや注射する減感作療法、すいなど、「病気でもなく健康でもない環境病が目立つ」という。腸から治すことを重視し、ミネラル、ビタミンを摂る食生活指導、サプリメントによる栄養素補充など統合医学を実践している。

No.2105
小児科
むらさき
でむらさき
札幌市
札幌市
札幌市

出村 守院長



胎盤通過性のある環境ホルモンは、精子の減少や卵子の老化、不妊症など子どもの将来、次世代へも悪影響を及ぼす。「脳の発育にもかかわるため、対

環境病に免疫療法実践

有病率が上がり、遷延化重症化している。

環境ホルモンによる汚染を背景に、化学物質過敏症や、体内に

入った食物抗原毒素が腸管壁から漏れて臓器へ運ばれ、多様なアレルギー反応を起こすこと。根本治療として力をいれているのが免疫療法区菊水5条2丁目

大1979年卒。住所 札幌市白石

策が急がれる。未来ある子どもたちを救いたい。札幌市白石区菊水5条2丁目